

学校名：倉吉市立東中学校

研修実施期日：2017年 5月19日

2017年10月12日

実施場所：倉吉市立東中学校

アドバイザー：中京大学国際教養学部

教授 杉江 修治

講師：島根大学大学院教育学研究科

千代西尾 祐司 先生

第1回 校内授業研究会 教科：国語

5月19日

講師：中京大学 国際教養学部

教授 杉江修治先生

第2回 校内授業研究会 (道徳)

10月12日

講師：中京大学 国際教養学部 教授 杉江修治先生

第3回校内授業研究会 (社会・英語)

1月22日(予定)

講師：中部教育局 指導主事 宇山 慎二先生、

嘉戸 浩二先生

倉吉市教育委員会 指導主事 矢田 佳代先生

**教育目標**

自ら学び、判断し、行動する生徒の育成

**研究テーマ**

「協同的な学びを取り入れ、自ら考え、相手と伝え合い、共に高まることを喜びとする主体的学習者の育成～東中版 主体的・対話的で深い学びの構築～」

学び合いの4つのポイント

- ①自分の考えが持てる
- ②自分の考えをわかりやすく伝えられる
- ③人の意見を理解しようとする。「わからない」が出来る。
- ④友達と自分の意見を比べて、よりよい意見を生み出せる。

**研究仮説**

協同学習を授業に取り入れ、自ら思考し、相手に表現し、相手の考えを聞く姿勢を身につければ、主体的な学習が定着し、学力(主体的に判断し行動してよりよく問題を解決する資質)が向上する。

**経緯**

平成26年度から中京大学 国際教養学部 教授杉江修治先生を年間に2回ずつ招聘し、指導を受けながら協同的な学びを研究している。中学校では教科の枠があり、「教科の特性」という枠にとらわれ、学校挙げての協同的な学習の定着が我が校でも難しいと感じている。そこで、今年度は、どの教科にも共通する協同学習の基本的な考え方や授業での具体的な手法を焦点化し、教科の枠を超えた職員全員で取り組む協同学習を目指した。

**今年度の校内授業研究会**

**協同学習研修会**

5月15日

**第1回校内授業研究会**

<杉江先生の指導・助言より>

東中の授業は

今、求められている教師の姿からすると  
足りない

×熱心で教え上手なよい先生(従来のよい先生)→これでは達成できない

×生徒が先生を頻繁に呼ぶ→依存的学習・・・「先生、教えて!」→教えちゃう

×生徒ができないのを生徒のせいにする

×興味の湧かない課題の提示

○生徒が自分で学び取ることが学習

○「子どもはやれるはず!」と思っている教師

○生き生きと話し合う授業。話し合いを深めるためにどうしたらいいのかを考える教師

・「めあて」や「授業の流れ」を示すのは協同学習の形をアピールするためではない。形で満足しない!

○高め合う授業を通して学級づくりをする。

○集団の仲間全体が高まることを目的として活動すること

→仲間を高めなければならない&仲間の声かけに答えなければならない という感覚

○人は、目標がはっきりしていないと動かない。学力が定着する生徒は、何のための今(この活動)なの

かがわかっている。

○しっかりとした個人思考。本当に大変な生徒にはこのときに個別指導を。

<研究会を終えて>

「自分の授業を通して、この生徒達を伸ばし、このクラスの学級経営をするという意識」を東中の先生方全員が持つことを研究主任から提案。先生方にその気持ちが薄ければ、生徒には伝わらない。学級経営は学級担任だけがしていくものではない。自分の授業でそのクラスを作っていく！生徒一人一人を高めていく！全員がそういう気持ちで授業をすれば、生徒を見る視点が今までと違ってきて、多方面で認められる、自尊感情の高い生徒が増えていき、「生徒が育つ」ことにつながるのではないかということを提案し、授業や学級経営への意識を高めることにつなげようとも提案した。

## 第2回校内授業研究会

<杉江先生の指導・助言より>

先生方の授業を参観されて

東中は

### 授業が大きく変わった

○・・・出来ていること △・・・これからの努力点

○生徒が活躍する授業になってきた

○子どもが自分で動けるだけの舞台の準備が多く見られた。・・・それがあると、子どもが自分で動き始める。

○全員が教科書を開いている授業。ホワイトボードへの記入の仕方が例示されていてよい。

○めあて「全ての問題がグループの全員ができる」→教え合う→じゃんけんで決まった生徒が班代表として先生の検定を受ける。どの子も説明できる仕組み。

△振り返りの時間をとること。終わらなかったことを家庭学習につなげる工夫を。

△5人という人数は活動によっては人数が多すぎる。

(5人班6つ→4人班もつくる)

△発表の時は、何を伝える発表なのかという課題意識をしっかりと生徒が持っていること。

△グループ発表に対して先生が引っ張っていく形。先生リードになってしまっている。

公開授業(道徳)について 杉江先生より

- ・授業の流れの説明は、活動の意味を知らせる。子ども達に「これならできそう」と思わせる。
- ・先生が本文を音読するなら、それをどのような構えで聞くか意識を持たせることが必要。
- ・流れを話すときにワークシートを渡しておく。流れとワークシートは一致していた方が、生徒にはわかりやすい。
- ・消極的な生徒の集まりのグループでは、自分が書いたものを見せることもコミュニケーションと考えて手当を講じると良い。
- ・話し合いがうまくいかないグループは先生がコーチング。
- ・自分がグループに貢献することの意味を折に触れて生徒に伝える。
- ・「友達の意見で納得できたことは取り入れよう」という教師の声かけがよかった。良いものは取り入れさせる。
- ・映像を見せるときも視点を伝えてから見せると良い。
- ・先生が反応するのではなく、生徒同士で語り合わせる。話がそれたら先生の出番。
- ・人の意見を踏まえて自分の意見が言えるようになると良い。
- ・ワークシートは「我が事」に引きつけて書かせると良い。

<研究会を終えて>

杉江先生から今回の授業研究会で私たち東中の職員にいただいたテーマは「貢献」だったように思う。「自分はクラスに貢献するために発表する」という意識が生徒にあるかどうか、協同学習が出来る風土が学校にあるかどうかの1つの大きな指標となる。学校は単に勉強のよく出来る子を育てているのではなく、将来社会貢献できる人材を育成している。授業の場だけではなく、学級経営の場においても、その感覚を私たちが持ち続けていなければ協同的な学びのある授業は成立しないということを実感した研究会となった。